

神仏融合の信俗

——媽祖信仰と中国仏教の関連性について——

張

凱

目次

- 0. 序論
- 1. 神仏融合と媽祖信仰の位置づけ
 - 1.1. 神仏融合の信俗から見る「媽祖信仰」
 - 1.2. 媽祖信仰の位置づけと三教
- 2. 媽祖信仰と中国仏教の関連性
 - 2.1. 両者の関係性の有無についての再検討
 - 2.2. 朝廷にとっての仏教と媽祖信仰
- 3. 融合の形—媽祖信仰と観音
 - 3.1. 観音の女性化
 - 3.2. 信仰思想の交渉—媽祖と観音と共に関わる人物
- 4. 結論

0. 序論

航海・漁業に従事する者の命を守る女神として信仰されている「媽祖」^①は、中国において最も影響力の大きい民間信仰として有名である^②。媽祖信仰は、中国沿海部を中心に拡大し、さらには日本、ベトナム、タイなどの国々にも伝播した。このように諸外国に伝播し、地域化を遂げた背景には、媽祖信仰の説く「海難から人々を救う」という救済者としての特質が深く関わっていると考えられる。

さて、媽祖信仰は、仏教とも関係性が見出されるのであるが、これについて、以下の観音に関する二種類の説がよく知られている。一つ目は、明代の『天妃娘媽伝』の「第二回 玄真女得佛真傳」に示される話に基づく説である。この伝承によると、前世に女神として生きていた媽祖は、観世音菩薩に出会った際に仏教の法門を授かったと記されている。この伝承によって媽祖が観世音菩薩の弟子であるという説が定着したのである。二つ目は、『太上説天妃救苦靈驗經』などに伝承されているように、媽祖を観世音菩薩の化身と見なす説である^③。これら二説

の伝承によって、媽祖は觀世音菩薩と混淆されつつ信仰されて、中国仏教において尊格とみなされたという解釈が示されている。

そもそも仏教との関係性を認めない立場の研究も多数あるが、関係の有無に関して未だ明確な結論が出ていない。仏教と媽祖信仰の関係については上に挙げた二説が有名であり、仏教との関係性を認める先行研究は、李豊楙（1993）、釈厚重（2005）などがあげられる。李豊楙は、媽祖信仰と三教交渉の関わりについて、^④釈厚重は、媽祖と觀音の関係について着目し、媽祖信仰と仏教の関係性を認めている。

また、日本の先行研究においては、平木（1984）は、従来の媽祖と觀音に関する研究が仏教と中国思想学の二つの分野で個別に行われている状況に対して、「実際の民衆の信仰レベルでは、両者が渾然と融合しているのをみると、両者を分断して研究している限り、ことの真相は明らかになってこない」と警鐘を鳴らしている。^⑤

一方、両者の関係性を否定する研究者には、例えば葉明生（2009）、王福梅（2010）などがいる。彼らは、媽祖信仰は仏教よりも道教との関係性が深いと主張している。

しかし、筆者は、媽祖と觀音の関連性という視点に限って見ても、媽祖信仰は中国仏教と決して無関係ではないと考えている。さらに、觀音以外にも、媽祖信仰と中国仏教が興味深い関連性を持っていることも確実である。

本研究によって、宋代という重要な時代において、中国仏教と媽祖信仰の両者が融合する形・融合の動機などが解明される。

1. 神仏融合の信俗—媽祖信仰と仏教

1.1. 神仏融合の信俗から見る「媽祖信仰」

中国の媽祖信仰は千年以上の歴史を有し、民間においては今なお媽祖信仰特有の俗習が根付いており、儀式が盛んに執り行われている。宋代に誕生した媽祖信仰は、それ以前に既に中国に流布していた仏教から様々なものを受容してきた。一方で、中国仏教もまた、宋代・元代を経て、次第に三教交渉の道へ向かい、媽祖信仰との融合がより進んでいった。神仏融合について、「信俗」という方法が存在する。

まず、「信俗」という言葉の意味を確認する。辞書を調べると、直接に「信俗」という言葉が出てこない。ただ、『論衡・変虚』などでは「信俗」を「信仰」の意味で用いている。^⑥本論では「俗」の俗習・儀礼を通して、「信」の部分为民衆が受け入れやすいようにしたものという意味でこの語を用いる。

中国仏教と媽祖信仰の両者は哲学的な教義あるいは政治的な側面を含む一方で、俗的な作法や儀礼が執り行われてきた。この点から見ると、仏教も媽祖信仰も、教義や信仰を世間のあら

ゆる階級の人々に伝えるためには信と俗が必要であると考えていたことがうかがえる。

「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」に登録された媽祖信俗とは、媽祖信仰の一部であり、信仰の真義を民衆にとってわかりやすく親しみやすいものにする方法である^⑦。そして、媽祖信仰と三教の^⑧関係について、従来、様々な議論がなされてきた。特に、媽祖信仰と最も関りが深いのは道教、仏教、儒教のうちのいずれであるのかということが問題にされてきた。

1.2. 媽祖信仰の位置づけと三教

媽祖信仰が誕生する宋代になると、道教や儒教が中国的なものであるのは当然のことながら、外來の仏教においても中国化が顕著になる。興味深いことは、単に媽祖信仰が三教から影響を受けただけではなく、三教もまた媽祖信仰の影響を受け、女神としての媽祖を菩薩、神仙、聖人と混淆して一つにしていた点である（表1）^⑨。

媽祖信仰に関する文献より、媽祖信仰は道教と関りを持つ以前から仏教と深く結びついていたことがうかがえる。

経典の成立順に従えば、最初に媽祖の身分を記録したのは「聖墩祖廟重建順濟廟記」であり、そこでは彼女の生前の姓氏が「林」であったことが言及されている。次の「題順濟廟詩」^⑩は、媽祖が巫媼の身分であったことを伝えている^⑪。なお「表1」に挙げた文献以外にも媽祖に関する宋代の文献があるが、それらの記事は表に挙げたものと大同小異である。

表1：宋代の媽祖について

宋代・作者・著作	生前と身分
① 廖鵬飛、1150年「聖墩祖廟重建順濟廟記」	(1) 林氏，湄洲嶼人。初，以巫祝為事，能預知人禍福 (2) 當夕遍夢墩旁之民曰：‘我湄洲神女，其枯差實所憑，宜館我於墩上。’父老異之，因為立廟，號曰聖墩。
② 黄公度、1151、「題順濟廟詩」	生前不厭混巫媼
③ 陳宓、1156年、「白湖順濟廟重建寢殿[上梁文]」	妃1正直聰明…神豈厭舊
④ 丁伯桂、1230年、「順濟聖妃廟記」	神甫陽湄洲林氏女，少能言人禍福，歿號通賢神女，或曰龍女
⑤ 黄巖孫、1257年、『仙溪誌』卷9「三妃廟」	順濟廟，本湄洲林氏女。為巫，能知人禍福，歿而人祠之。
⑥ 劉克莊、1257年、「風亭新建妃廟」	去而為神…與國家祚運相為無窮1
⑦ 李丑父、1259年、「靈惠妃廟記」	(1) 妃林氏，生於莆之海上湄洲 (2) 壬子歲…守僧与祀享者皆有所止

そして、宋代の文献資料を確認した結果、媽祖は生前元々莆田湄洲嶼に生まれ、林という氏族の女であって、自分の村で巫を担当していた。また、特別な能力を持っていたため、常に巫媼たちと交流があった。媽祖は生前、よく人を助けたため、死後も人々は彼女を祀った。このような経緯で、死後、彼女は女神として、信仰の対象になったのである。女神となった彼女は神通力を使い、海難に遭う人を救う存在として信仰されていった。女神としての媽祖の偉大な功績が認められ、後に、朝廷から、直接、封号を賜ることになる。そうして媽祖の名声は広まり、有名な海の女神になったのである。

宋代の資料を通して、宋代時期の媽祖は「神女」、「神」という身分であったことが確認できる。媽祖が観音の脇侍である龍女になり、龍女は観音を中心とした三尊形式において脇侍としてよく表される。しかも龍と様々な点で結び付く事態には、原因となるものが存在する。

龍・龍女と媽祖の関係について、媽祖を祀る「張天師祠」、「神女祠」、「順濟廟」という三つの祠（堂）廟に封号が与えられたことを記録した資料がある。

『宋会要輯稿』¹³「礼20・張天師祠」は、当時、道教と媽祖信仰がお互いに排斥しあわない根拠となる記録である。「廟中寧海鎮順濟神女廟靈惠夫人」の記事によれば、祠に祀られる複数の神の中で主神となるのは祀保禧真人であることが理解できる。媽祖の本廟、あるいは祖廟にある媽祖の本尊が朝廷から封号を受け取ることによって、格が上がる。それに伴って、媽祖を祀る他の祠廟も格が上がり、祭祀の規模も大きくなった。

「礼20・神女祠」は媽祖を主なる神として祀る場所である。「神女」とは媽祖のことである。また媽祖に封号が授与された年が順に示され、聖墩祖廟に「扁額」（廟額）が授けられたことが記録されている。このことから1123年以前、祖廟は「神女祠」といわれていたことが知られる。

「礼21・順濟廟」は「礼20」の続きである。紹興（熙）四年十二月（1185）には、媽祖は「靈惠妃」の位を賜り、それ以前と比べて地位が高くなる。しかし、「順濟廟」という廟額は、媽祖廟のみに用いられたわけではない。別の神を祀る廟でも「順濟」という封号を授けられたという例が二例確認される。両者共に男性の神である。そのうち一人は海神であり、もう一人が龍神である。

龍神は媽祖と一緒に説話や文献などに頻繁に登場する。董其昌の『龍神感應記』には媽祖と龍神が同様に川や海を鎮める能力を持っていることが言及されている。¹⁴また『天妃顯聖録』にも「龍王来朝」という話がある。一般に龍や龍王は川や海を鎮める能力以外に、干魃のときに雨を降らす能力も持っていると考えられている。実は媽祖信仰でもこの利益があるとされている。媽祖信仰の初期の段階から既に「洪水と干魃、疫病、海賊の災難」の際に媽祖に願えば、それらの災難を回避できるという考えが存在していたといえる（表2：媽祖信仰の利益の例）。¹⁵

表2：媽祖信仰の利益の例

作者、著作、年代	引用内容	利益・災禍に対応する
宋（1150）・廖鵬飛、「聖墩祖廟重建順濟廟記」	歲水旱則禱之，癘疫降則禱之，海寇盤桓則禱之	洪水と干魃、疫病、海賊の災難
黄公度、1151、「題順濟廟詩」	萬戶牲醪無水旱，四時歌舞走兒童。 傳聞利澤至今在，千裏危檣一信風。	④干魃 ⑤風を吹く
陳宓、1156、「白湖順濟廟重建寢殿[上梁文]」	(1)「今仰白湖香火，幾半天下」 (2)年穀順成。賈無風雨之災，士有雲龍之慶。春秋載祀…報九重之寵命。	(1)より、伝播した範囲はおおよそ南宋国の半分であったことが分かる。 (2)豊作、商売繁盛、出世

『咸淳臨安誌』^⑬に「媽祖は歴史上の実在人物であり、林願の娘であるとする。彼女は筵に乗って、海を渡る能力を持っている。宋太宗雍熙四年（987）に湄洲の地で天に昇り、神になった。当時の人々は彼女を「龍女」と呼んだ」という内容が記されている。

文章に出てくる媽祖を指す「龍女」という言葉を巡って、観音との関係の有無について、二つの見方がある。一つは、「龍女」という記述から、生前の媽祖を名門の莆田唐九牧林の一族と関連付けて、媽祖がその子孫から、龍女と呼ばれる^⑭とするものである。もう一つは「媽祖が普通の漁家の娘」とする見方であり、蔣維鈞（1986）などによってこのことが指摘されている。しかし、両方ともに決定的証拠に欠ける。したがって、媽祖の身分について再考の余地があるといえる。

以上の検討より5点のポイントをまとめることにする。

- ① 媽祖と龍は類似する能力を持っている。
- ② 媽祖が龍女として呼ばれるのは宋代からである。
- ③ 道教の神と媽祖とを一ヶ所に合祀する事例は、宋代に既に確認される。したがって、道教側は媽祖信仰を排斥していないといえる。
- ④ 海神、龍神、水に関係がある廟祠にも「順濟」という廟額が授けられる。つまり、「順濟」という廟額は媽祖廟専用ではないのである。
- ⑤ 媽祖廟は最初「神女祠」と名付けられていた。

以上の5点が重要なトピックであるといえる。そのうちの③では宋代における道教と媽祖の関係について述べた。同じ場所に祀られていたという状況から判断すると、両者が同じ神統譜の神と考えられていた可能性が高いといえる。しかし、実に興味深いのは、宋代の道教は、媽祖を正式に自分の神統譜に組み込んでいない点である。道教が正式に媽祖を自分の神統譜に組み込むのは明代になってからである。^⑮

中国の民間信仰や俗習などに対する道教の影響についてはしばしば指摘されているが、道教の

影響力が全ての事象に及んでいるわけではない。例えば、厳密に言えば龍・龍神は最初から道教に含まれていたのではない。¹⁹さらには、多くの神女、女神についてもこれと同じ事態が考えられる。「神女」「女神」という言葉もまた道教特有の名称ではないのである。また研究者のなかには道教の「神女」「女神」は媽祖の影響であると指摘する者もいるが、その可能性は低いといえる。なぜなら、道教よりも遅れて誕生した媽祖信仰の初期では、その信仰が持つ影響力は弱かったからである。媽祖が正式に道教の女神として道教經典に登場するのは明代の初期である。²⁰

これに対して、元代の黃淵は『黄四如文集』の「聖墩順濟廟新建蕃厘殿記」で既に「補陀大士の千億の化身」(媽祖は補陀大士(観音)の無数の化身の一つ)ということ述べている。つまり、上記の道教經典よりも早い元代から確認される。時系列で考えると、媽祖が観音の化身であるという説は宋代末期に既に萌芽が見られる。したがって、媽祖と龍女に関する記述は宋代から既に存在していたといえる。媽祖は元々、観音の脇侍である龍女であったという説は、上で見てきた媽祖の特徴から着想を得たものと考えられる。

上で確認したように、宋代において既に道教の神が媽祖と同一の場所に合祀されていた。一方で仏教系の寺院においてもまた宋代に媽祖と仏教系の仏や菩薩とを合祀していた記録が残っている。例えば、「靈恵妃廟記」(表1参照)に「守僧與祀」という記述が確認される。

最後に、媽祖信仰と儒教の関係について言えば、儒教思想を基盤とする朝廷側からの勅命や封号の授与が早い段階から確認される点からうかがうことができる。但し、媽祖信仰が儒教特有の「仁愛」、「孝行」、「護国」などの要素を取り入れ、正式に広く宣伝するのは三教合一のシステムが成熟した明代と考えられる。

2. 両者の関係性の有無についての再検討

2.1. 両者の関係性の有無についての再検討

媽祖信仰と仏教との間に関係性を認めない説もある。主要な説を3つ取り上げ、仏教と媽祖信仰との関係性を否定する主張の問題点を指摘する。以下の3点が両者の関係を認めない立場の論拠となるものである。

- (1) 媽祖は道教に属する正式な女神であるという認識が定着している。
- (2) 中国仏教と媽祖信仰の関連性が少ない。元代になって初めて媽祖と観音とが結び付けられたという歴史的経緯がある。
- (3) 「信俗」の定義についての問題である。中国仏教における信俗は、本来、仏教にはなかった思想である。媽祖信仰との関連を見た場合、俗信に関する部分が多く、本来の仏教教義から隔たりがある。

まず(1)については「1.2」で検討した龍や女神に関する身分に関する内容と重なる。したがって、(2)と(3)について検討する。まず(2)については次の四点から説明する必要がある。

第一は中国の女神信仰からの影響である。元代に限定して検討するだけでは良い結果は得られない。中国において、媽祖や女性化した観音信仰は、土着の信仰、特に女神信仰から影響を受けたことが考えられる。中国古来の女神信仰は、観音と媽祖の両者に影響を与え、またはその両者がお互いに影響し合った場合がある。²¹第二は、媽祖廟は最初から僧侶によって管理されていたという点である。最も有名なものに元末の危素の「河東大直沽天妃宮碑記」がある。²²第三に、法鼓会という神仏融和の法会がある。仏教の儀式で用いる音楽が媽祖を祀る際にも使用されるのである。第四は、媽祖信仰が明らかに中国仏教の思想的影響を受けている点である。例えば、四面媽祖のことが挙げられる。観音があらゆる苦難から衆生を救済するという教説の影響を受けて、海難だけでなく、あらゆる苦難から救済する四面媽祖という尊格が誕生したのである。

最後に(3)「信俗」の定義の問題について検討する。中国仏教は、本来的な仏教思想以外の部分では民間宗教の役割も担当している。本来の思想の核となる「信」「真実」を全面に出すよりも、俗的な要素を強調し、あるいは加えることで、人々がより理解しやすい内容へと民衆化しようとした結果である神仏融合がうかがえる一例として、台湾南部の人々は媽祖を「仏」と呼ぶということがある。²³

2.2. 朝廷にとっての仏教と媽祖信仰

媽祖信仰は、中国の土着信仰としてどの時代においても順調に受け入れられ、発展してきたと考える人が多いかもしれない。しかし、実際は、媽祖信仰が外来の仏教よりも常に優位な立場にあったというわけではない。その原因はいくつか考えられる。

- ① 媽祖信仰の発祥の地である福建省は元々仏教の影響が強い地域である。
- ② 民間信仰へと発展し始めた当初は、媽祖信仰には朝廷から運営の許可が下りなかったという事実がある。後に無事許可が下りるが、媽祖の身分を「鬼」などの良くないものと同一視する見方が、一時的だが存在した。また祭祀が「淫祀」と呼ばれることもあった。
- ③ 中国で長期にわたって受容され・発展してきた仏教は、宋代になると中国に深く根付いた宗教になっていたことも原因の一つといえる。「救済」、「慈悲」などの概念以外にも「護国」、「報恩」、「仁愛」などの儒教思想を基盤とする、朝廷に対して都合の良い理念を仏教が有していたことも重要な点である。また媽祖信仰は理念、言葉といった多方面で仏教からの影響を受けたとされている。また仏教からの外的なまたは内的な援助もあった。²⁴

信仰発祥の地である福建省における仏教的影響の代表的なものに「戒」が挙げられる。宋代の福建省の仏教界において、当時、多くの仏教寺院で行われていた「三犠祭祀」を、不殺生という戒に基づいて廃止しようとする運動が起こった。そして、この転機によって、媽祖信仰の地位は向上したのである。この経緯については有名な南宋・陳淳（1159-1223）の『上趙寺丞論淫祀』からうかがえる。

『上趙寺丞論淫祀』²⁵

わたしが思うに、南方の人はとにかく淫祠を好むようだ。しかしここ漳州の風俗はその中でも最もひどいものではないか。街から村落に至るまで、淫祠に祀られる鬼の名称は様々である…これらの淫祠は各廟に神を迎える儀式があり、毎月のように「迎神の会」が行われている。新春になると、すぐに迎神のための財物を調達しようとする…王朝の封錫したものでもあるし、礼制に合致しているというべきである…しかしながら所謂聖妃（媽祖）などというのは、甫田あたりの鬼である。いったいこの漳州と何の関係があるというのか。

この『上趙寺丞論淫祀』²⁶は、宋代の媽祖信仰の祭祀に対する批判的な意見を述べる数少ない資料である。陳淳は南宋の儒学者朱熹の弟子である。彼は師の考え方を受け継ぎ、一部の儒学者たちの代表的な存在となる。上掲の文章には、南の方面における盛んな「淫祀」と蔑称される祭祀の作法について適切に処分すべきだという意見が述べられている。「淫祀」とは朝廷が承認していない祭祀のことである。当時、媽祖信仰は伝播の範囲を広げ、影響力も強くなっていたが、朝廷に重視され、必要とされるまでには至っていなかったと考えられる。また、媽祖信仰の祭祀儀礼に関する規範が設けられた程である。しかし、民衆はその規範に従わず、独自の媽祖に対する祭祀を執り行った。そのため、媽祖信仰は儒教側の陳淳によって「淫祀」に分類され、名指しで批判されたのである。

また陳淳は仏教も非難し、同じく「淫祀」に分類した。そうした理由には次の三つが考えられる。一つは、仏教は自らの悟りが重要視されているが、他人、特に国家の利益に繋がる行いについては義務付けられていないからである。二つは、寺院において殺生がなされ、神仏の祭祀が執り行われていたからである。三つは、仏が異国の神であるからである。²⁷

前述した「守僧與祀」の「祀」という語は家畜を神に供える祭祀のことを指すと考えられている。実は、北宋末から南宋にかけて、神仏融合の仏教寺院では祭祀を執り行うために、「殺生」をしていた。福建において、仏教寺院で殺生を伴う祭祀を執り行っていた状況を変えたのは慧邃禅師である。慧邃禅師は、『上趙寺丞論淫祀』(1208-1217)が著される前に、仏教の真意を求め、民衆の愚痴や朝廷の不満に気づいて、迅速に対応した人物である。

宋代においては、神仏共に仏教寺院で祀られていることは当たり前の光景であった。当時、通遠王という宋代で最も人気があった男性の海神が存在する²⁸。道中つつがなく航海を終えることを叶える神として信仰を集めた。海上貿易が順調にいく霊験が有名である。俗習として民衆は生臭物を通遠王に供えていた。

宋・紹興元年（1131）、慧邃禅師は延福寺の住職になる。慧邃禅師は、自身が住職になる前から延福寺内にあった仏教的に不適切な行為を正すことに尽力した。また民衆に戒を教え、寺院で殺生する風習が流行していたこの地での教化に励んだ。しかし、寺院で生臭物を通遠王に供える風習は続いていた。慧邃はいろいろと考えた後、ある日、民間の俗習に従い、民衆の目の前で、あたかも神と会話をしているかのように言葉を発しながら占いをした。結果は、慧邃は通遠王の承認を得て、通遠王に五戒を授けた。それ以降、延福寺はそれまでの殺生を伴う祭祀を止め、代わりに仏教的な「水陸法会」を執り行うようになった²⁹。そして通遠王は仏の弟子になったのである。朝廷の代表者である儒学者たちはこの出来事を高く評価した。

実は、媽祖信仰とこの出来事には関係がある。前述したように慧邃禅師と陳淳が活躍した南宋から媽祖信仰は急速に発展する。しかし実状としては、朝廷は民衆の請願を受理した当初、媽祖信仰に対して、ただの土着信仰という認識しかなかった。以上のことから、後の媽祖信仰の目ざましい発展は、仏教からの影響と時代状況の後押しがあった結果であると考えられる。元代になると、治国重視の考えにより、朝廷側は同じ海神でも媽祖信仰を重視し、宋代に流行した通遠王を軽んじた。政策も媽祖信仰を特別扱いする。例えば、『元典章』には、他の神に関して、「風・雨を祈ることに朝廷のお金を使うのは禁止する」との記事がある³⁰。

その一方で、媽祖信仰よりも歴史があり、常に優位な立場にあった仏教は排仏論に遭う³¹。しかし、宋代から元代にかけて、仏教は朝廷の基盤となる儒教との交渉があった。宋代には寺院が非常に多く、中でも福建省と浙江省はそれが顕著である。宋代において仏教は民衆からの人気が高かったことは注意すべきである。そして、福建省以外の沿海地域では、浙江省においても南宋から媽祖信仰が仏教化していくのである³²。

3. 信仰思想の交渉—媽祖と観音と共に関わる人物

3.1. 観音の女性化

観音は慈悲深いイメージが非常に強い菩薩として有名である。現在でも、観音菩薩の起源や女性化への過程については議論され続けている。中国をはじめとする東アジア、さらには北伝仏教圏では女性化した観音菩薩に対する信仰が流行し、女性的な顔立ちの観音菩薩像が数多く確認される。中でも人々によく知られている「慈母観音」や「白衣観音」などの女神的な観音への信仰には女性化する経緯がうかがえる。

彌永信美の『観音変容譚』（2002）、宮治昭の『仏教学入門』（2013）、岩本裕の『仏教説話の伝承と信仰』（1978）などでは観音の女性化した原因について論及される。

彌永信美は三つの方面から観音菩薩が女性化する経緯を考察している。一つは、『妙法蓮華経』の第二十五章「観世音菩薩普門品」（観音経）で、観音菩薩が女性に化身する点からである³³。二つは、中国の民間信仰と観音の女性化の関係と、日本への影響という点からである。三つは、日本における女神としての天照大神と観音菩薩に関する本地垂迹論の点からである³⁴。彌永信美の指摘によれば、経典中に観音菩薩が女性の姿に変化する教説が存在するが、それが日本において観音が女性化する直接的原因であるとは言えない。そうではなくて、中国で観音が女性化した後、それが日本に影響を与えたことで日本独自の本地垂迹論が誕生したと彌永氏は結論付けた。

宮治昭によって、観音信仰を考察する場合の二つの視点が示された。仏教外の異宗教や異文化との混淆と大乘仏教的な慈悲・救済という二つの視点である。この二点も観音の女性化に関係があると考えられる。

岩本裕は、観音の成立には西方の影響が考えられること指摘した。彼は観音の原型を他の女神に求めた。例えば、イランのアナーヒター女神やガンダーラ地方に受容されたナイアやアルドフショーである。

三人の研究成果によって、観音が女性化した原因は、慈悲性、変幻自在性、中国内での影響、原型が想定されることが分かった。以上のことを踏まえると、確かに観音は誕生当初から女性化する要因を有していると言えるかもしれない。さらには、現在の中国内の状況に目を向けると、民衆は、観音が菩薩の面と女神の面とを半々に含む存在であると認識している。媽祖信仰と観音の用例から判断すると、遅くとも十四世紀から、菩薩と女神の要素を半分ずつ含んだ観音を信仰する現象が広範囲にわたって確認されるようになる。

3.2. 信仰思想の交渉—媽祖と観音と共に関わる人物

さて、どのような経緯で、女性化した観音は媽祖と結び付き始めるのか。次の三つを原因として挙げられる。

- ① 観音が持っている慈悲・救済の性格
- ② 歴史的な原因があるといえる。具体的に言えば、当時の女性（特に宋代）の地位が関係していると思われる。
- ③ 海に関わる異文化との混淆

まずは①から見ていく。中国における媽祖と観音との共通点として慈悲と救済の性格が挙げられる。観音の慈悲深いことは通説である。媽祖との関連については、『観音経』所説の観音

による七難からの救済の教説がまず挙げられるであろう。この七難の一つに海難³⁵⁾がある。そのため、古代から船頭や乗組員の間では、観音が命を救ってくれると信じられていた。一方、媽祖についてもまた、黄公度の『莆陽知稼翁集 卷5』「題順濟廟詩」（南宋紹興二十一年・1151年）や「海難救護」という有名な物語などに、名前を称えれば、海難に遭った人を助けることが記されている³⁶⁾。したがって、海難から救済する能力は、観音と媽祖の両者に見られるのである。

次に②の歴史的な原因について検討する。ここでは宋代が重要な転換期になってくる。唐代が終わると、宋代の仏教は次第に三教交渉に向かって行く。菩薩は親しみやすい存在として民衆に信仰され、半神化した。中でも観音菩薩は、宋代では朝廷にも民衆にも人気が高かった。そして、他の信仰と融合される事態が多々あった。例えば、唐代から誕生して宋代に大きく発展した泗洲文佛信仰も観音や媽祖と密接な関わりを持っている。そのため、泗洲文佛は媽祖と同様に観音の無数の化身の一つと見なされていた。

興味深いことに、媽祖金身とされる現存する元代の尊像が実は観音像や泗洲文佛像である可能性が、ある学者によって指摘されている³⁷⁾。祖廟にある元代の媽祖石彫像を見ると、男性的な印象を受ける場合が多い。おそらく男性的な観音がそのモデルとなったのであろう。また泗洲佛祖寺にある泗洲文佛像は元代の男性的な観音をモデルにして造られたと考えられる。このように、男性的な観音像をモデルとして媽祖や泗洲文佛の尊像が造られたことを踏まえるならば、三者を混同させてしまうのも理解できる。

このことは、観音がインドでは元々男性の菩薩と見なされていたことに起因する。図像表現の観点から見ると、元代の泗洲佛祖・観音・媽祖は、額の広い男性的な姿で表される。また輪郭線がふっくらして全体的に人間味溢れる様子が特色といえる。そして服飾は非常に簡素であり、仏の印象と重なる。

泗洲文佛については、『宋高僧傳』、『佛祖歷代通載』、『僧伽贊』などに参考となる記事がある。

『佛祖歷代通載』卷十二、³⁸⁾（四十二・戊申）

泗洲大士僧伽詔入宮供養…有旨命大士致雨。僧伽以瓶水散洒…異香郁然…僧伽何如人。對曰。觀音大士化身耳…

これによれば、泗洲文佛とは、僧伽（628-710）が没後に賜った諡号である。僧伽は戒名である。彼は唐高宗顯慶四年（659）には唐の涼州で、唐高宗龍朔元年（661）には泗洲（今の江

元代（公元1271-1368）における三つの例



媽祖石彫像、蔡相輝（2006） pp.345。現在、祖廟に所蔵されている。



福建省・八尺門橋洞亭の泗洲文佛像。閩東日報「茶亭最常見的泗州文佛」2017年12月18日付朝刊、B03版。



福建省・竹岐郷観音岩寺で撮影された元代・男性的な観音像。

蘇省）で説法を行う。彼に関する不思議な話はいくつもある。例えば、景雲三年（709）、朝廷は僧伽に雨を降らすよう命令する。僧伽は水瓶を持ちながら、水をまく。しばらくすると、濃雲が彼の居る場所に近づいて来て大雨を降らした。以前、皇帝は萬回禪師に「僧伽とは一体何者だ」と尋ねた。その際、萬回禪師は「観音菩薩の化身」と答えたのである。

泗洲文佛に関する記事より、観音・媽祖・泗洲文佛の三者の共通点を以下に挙げる。

(1) 三者とも朝廷からの封称や優遇があった。

(2) 泗洲文佛がもたらす利益は観音と媽祖がもたらす利益とほぼ同じである。泗洲文佛が雨を降らすために水瓶を持ちながら、水をまく様子は、観音のイメージと重なる。僧伽の没後、次第に彼の菩薩化が進み、宋代では泗洲文佛信仰として確立した。

(3) 明代の三教交渉の影響下でできた伝奇小説『西遊記』には観音・媽祖・泗洲文佛との深い関わりがうかがえる。観音は、善財童子・善女龍女の二人の脇侍とともに普陀山³⁹にいる。明代では、南海観音は普陀山に常住しているとされる。ところで、『西遊記』に媽祖が登場するわけではない。但し、同じく明代の伝奇小説『天妃娘媽伝』は、『西遊記』の書き方を模倣し、媽祖の怪異譚や逸話を記録するものとして創作された。それ故、『西遊記』の世界観は『天妃娘媽伝』と類似している。また『西遊記』の登場人物たちは『天妃娘媽伝』にもよく登場する。『西遊記』に登場する東海龍王の次男は泗洲文佛の弟子をモデルにしている。この次男は『西遊記』では観音の弟子とされている。

(4) 中国には黒面の観音像、黒面の媽祖像、黒面の泗洲文佛像がある。それらの像は、真実を守り、悪を退治するという信仰に基づいて造られた。

(5) 白衣観音と泗洲文佛と媽祖の関係を見ていく。⁴⁰媽祖との関連が見られる観音は、一般的に普陀山に常住している南海観音であるとされる。泗洲文佛が「白衣大士」とも呼ばれることから、白衣観音と深く関連しているといえる。泗洲佛祖寺には、この寺院では泗洲佛祖を男性的な観音として祀っているとの口伝がある。観音には種々の身相があり、泗洲文佛はその中の白衣観音とされた。蔡相輝（2006）の見解によれば、泗洲文佛の白衣に関する説は宋代に登場したと考えられる。泗洲文佛は、遅れて誕生した媽祖信仰と習合して以降、媽祖が自分よりも身分の低い女神であることを証明するため、媽祖よりも格上の観音になるのである。

以上、観音信仰を中心とした、泗洲文佛、媽祖、観音の三者間の交渉関係が明らかになった。

さて、三者ともに関連が見られる龍に注目すると、水にまつわる存在である龍は三つの信仰を橋渡しする役割を担っていたと考えられる。特に媽祖と観音の関係においては、龍の存在は非常に重要となる。何故ならば、媽祖は龍女とも呼ばれるからである。

媽祖の呼称の一つに、観音菩薩に仕える「龍女」がある。観音菩薩・善財童子・善女龍王（龍女）の三尊形式の図像がよく見られる。また、龍女が媽祖と同一人物であるとする見方がある。初めて媽祖と観音の関係を記した人物は、元代の黃四如である。彼は『聖墩順濟祖廟新建蕃釐殿記』の中で「即補陀大士之千億化身也⁴¹」と記した。また、各時代における媽祖の呼称の変遷より、宋代と元代において媽祖は「龍女」と呼称される。この龍女は龍王の娘であり、『法華経』『提婆達多品』中の「龍女成仏」の龍女であるとする見方が大半である。⁴²また、媽祖

の物語や説話などに登場する観音は補陀山に常住している。補陀落の位置については諸説があるが、中国では普陀山が観音霊地の補陀落であると思われる⁴³⁾。さらに、海に関する航海安全を祈念する民俗信仰と結び付くのである。

最後の③の海に関わる異文化との混淆について見ていく。媽祖信仰は時代が経つにつれて、沿海部を中心に拡大していき、さらには中国国内だけでなく、日本、マカオ、ベトナム、タイなどの国々にも伝播していった。各国に伝播していった要因には次の二つが考えられる。

一つは、華僑の存在である。華僑は移住した場所に媽祖廟を建てていった。媽祖信仰にとって、世界各地に移住した華僑は信仰が伝播するにあたっての推進力となった。彼らはまさに媽祖信仰を支える基盤のような存在である。二つは、文化の融合であり、例えば媽祖は日本のオトタチバナヒメの信仰と習合したことが推測される⁴⁴⁾。媽祖信仰は古くから仏教と結び付いていたが、現代でも仏教から種々な要素を受容している。現代の媽祖信仰に目を向けると、仏教以外の信仰や宗教の思想との融合あるいは習合も継続されている。

4. 結論

媽祖の社会的地位は時代が経つにつれて向上すると同時に、祭祀の規模も大きくなっていった。それには歴代朝廷の媽祖信仰に対する態度が大きく関わっている。つまり、歴代朝廷との政治的・経済的関係性のもとで媽祖信仰が発展・変容していったという歴史的事実は否定できない。

しかし、中国本土では、媽祖信仰の研究が多数あるにも関わらず、仏教との関連という視点を取り入れた研究はあまり行われてこなかった。そこで、本研究では、媽祖信仰と仏教の関連性に着目して、その重要性を考察した。

三章の内容をまとめると以下になる。

第一章においては、神仏融合と媽祖信仰の位置づけを考察した。媽祖信仰が誕生した宋代の時点では、道教側は媽祖信仰を自分の神統譜に取りこんでいなかった。そのため、融合に至るための明確な関係性を求めるのであれば、仏教との融合が最も早かったことが明らかになった。

第二章では、媽祖信仰と中国仏教の関連性を考察した。宋代・元代の民間社会では、媽祖信仰と比べると仏教は優位な立場にあった。しかし、朝廷にとっては、仏教と媽祖信仰に優劣をつけることよりも、両者を利用して民衆を統制することの方が重要な課題であった。宋代には、寺院が非常に多かったため、管理上の問題が出てきた。その上、一部の僧侶が仏教的に不適切な生活や祭祀を行っていたことが原因で、儒教側は仏教を激しく弾圧した。南宋では、禪宗が仏教の「戒」を強調することによって、寺院の混乱を抑えた。そして、元代、仏教は三教合一の方向に向かっていったのである。

第三章においては、媽祖信仰と観音に関する信仰が融合した形を考察した。媽祖信仰と同じく観音信仰から大きな影響を受けた泗洲文佛信仰は、宋代で媽祖信仰と習合された。三者の関係は明代の三教交渉の影響下でできた伝奇小説『西遊記』などにおいても見られる。そして、図像に目を向けると、泗洲文佛像は、観音の化身として男性的な姿で表現される。おそらく、元代の媽祖像は、男性的な姿をした観音像や泗洲文佛像をモデルにした可能性が高い。それ以降の媽祖像は、女性的な姿をした観音像とよく似ている。また、観音信仰は元々外来の信仰であったが、中国内の他の信仰や思想に大きな影響を与えたのである。

上に述べた考察によって、媽祖信仰と中国仏教はお互い影響し合っていたことが確認できた。今後の研究では、文献研究と現地調査とを合わせて、宗教と信仰の力が人々にどのような影響をもたらすのかを究明し、媽祖信仰が現代社会でも存続している意義を提示したい。

一次資料及び参考文献一覧

〔一次資料〕

- ・漢・鄭玄注、(唐)孔穎達疏『礼記正義』北京大学出版社(2000)、pp1521-1522
- ・唐・林蘊『莆田竊埭林氏大宗譜・墓考』(巻四)、pp.20-21
- ・宋・徐松『宋会要輯稿影印本』中華書局(1957年)
- ・明初・撰人不詳『正統道藏』「洞神部本文類」第342-343冊(一卷)、5紙4行
- ・中華媽祖文化交流協會編『媽祖文獻史料彙編』三輯、中国檔案出版社(2007)
- ・明・呉還初『天妃娘媽伝』上海古籍出版社(1990)
- ・明初・撰人不詳『太上説天妃救苦靈驗經』藏外道書(全36冊)第3冊、胡道靜等主編、巴蜀書社(1992)
- ・正新脩大藏經

〔書籍〕

- 吾妻重二、二階堂善弘編
(2008)『東アジア宗教之儀禮』雄松堂
- 彌永信美
(2002)『観音変容譚』(仏教神話学)法藏館
- 蔡相輝
(1989)『台湾の王爺信仰と媽祖』協和台湾叢刊3
(2006)『媽祖信仰の研究』[民95]秀威資訊科技
(2016)『「天妃顯聖録」與媽祖信仰』「歴代73」秀威資訊科技
- 釈厚重
(2005)『観音與媽祖』稲田出版社
- 李猷璋
(1979)『媽祖信仰の研究』泰山文物社
- 潜説友
(2012)『咸淳臨安誌』浙江文叢

蔣維鈞

(2014)『紀念蔣維鈞文集』海風出版社

李露露

(1999)『華夏諸神：媽祖卷』雲龍出版社

許更生

(2014)『媽祖研覃考辯』西安出版社

〔論文〕

菊地章太

(2017a)「民間信仰と佛教の融合—東アジアにおける媽祖信仰の拡大をたどる」『東アジア仏教学術論集』5、pp.29-47

(2017b)「媽祖崇拜の拡大と諸宗教との融合」『東洋学研究』54、pp.245-261

田中千晶

(2008)「オトタチバナヒメの祈り—“入水の図”の誕生と変容—」『甲南女子大学研究紀要第44号、文学・文化編』pp.61-74

平本康平

(1984)「媽祖と観音：中国母神の研究（二）」『大阪府立大学紀要』32、pp.43-57

日比野丈夫

(1985)〈批評・紹介〉李獻璋著「媽祖信仰の研究」『神奈川大学大学院言語と文化論集』22、pp.178

王福梅

(2010)「媽祖信仰與道教關係調查研究」『宗教學研究』4、pp.194-196

陳森鎮

(1993)「媽祖伝説是三教合一的產物」『理論學習月刊』pp.93-96

葉明生

(2009)「媽祖信仰與道教文化—民間道壇之媽祖信仰相關科儀及文化形態考探」『福建師範大學學報（哲學社會科學版）』3、pp.143-150

李豊楸

(1993)「媽祖与儒、釈、道三教」『歴史月刊』pp.34-42

注

- ① 「媽祖」という呼称は明代から用いられ始めたと推測されるが、清代以前の正式な文献には、この呼称が出ることがない。しかし、現在、「媽祖」という呼称が最も広まり、一般人に最も認知されている呼び方である。これ故、本論では、呼称の問題を取り扱う箇所以外は、原則、「媽祖」という呼称を使う。

媽祖信俗、Mazu belief and customs は、2009年9月30日に「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」に登録された（湄洲日報「媽祖信俗昨日申遺成功」2009年10月1日、朝刊、B5）。

- ② 皇帝からその信仰を認められた北宋の徽宗時代（1123年）より以前の文献にも媽祖信仰に関する記録が残っている。しかし、公的に中国の女神として媽祖信仰が中国の人々に認められたのは、やはり1123年からであると見るべきであろう。というのも、1123年に宋の皇帝の徽宗から「順濟」という号を賜った後、媽祖信仰は、その範囲を拡大し、全国的なものになることができたからである。それ以降、媽祖の存在は庶民と朝廷の両方から長期にわたって高く評価され、信仰対

象となったため、清の時代では「天後」（媽祖の封号の一つ）として崇められることになったのである。

- ③ 『太上説天妃救苦靈驗經』（1992）p.785
「齊天聖后。觀音化身。湄洲顯跡…」
- ④ 「三教交渉」と後で用いる「三教合一」についてここで説明しておく。三教交渉では、「交渉」ということを強調する。つまり儒教・仏教・道教、この三教が互い交流し、論争することを重視している。一方の三教合一では、三教の「融合性」を強調している。また、明代から三教が同一の神仏を信仰する現象が増えた。本論文では「三教交渉」という言葉は、三教が別々のものとしてお互いに接触し合う現象を指すものとして用いる。一方の「三教合一」という言葉は、三教が合わさって一つの状態へと融合した現象を指すものとして用いる。なお三教が交渉するという現象は、朝廷が生み出したものではなく、自然発生的な文化現象である。しかし、三教合一というところの融合は朝廷によって構築されたシステムである。
- ⑤ 平木[1984]pp.43-57
- ⑥ 東漢・王充著、『四部叢刊初編』第433～440冊本『論衡二』、景上海涵芬樓藏明通津草堂刊本『論衡・変虚』
「子韋不知，以為死禍，信俗至誠之感」
- ⑦ 例えば、三教交渉が盛行した後に、朝廷が儒教思想の「鬼神論」を重視する一方で、祭祀なども行った事例がある。この儒教思想における鬼神論の「鬼神を敬してこれを遠ざく」とは、『論語』雍也（第六）に示されている。つまり、鬼神などの信仰の問題は慎重に考えなければならないのである。
- ⑧ ここでは儒教、仏教、道教を三教と略称した。
- ⑨ 表1の作成にあたって注⑩に紹介する四つの書籍を参考にした。それら以外には「後村集・後村先生大全集91」も参考にした。
- ⑩ 媽祖信仰に関する文献の順番と内容については、下記の四つの書籍を参考にした。
 - 1、『媽祖文獻資料彙編』（2007）
 - 2、『媽祖信仰の研究』（1979）pp.5
 - 3、『台湾的王爺與媽祖』（1989）pp.125-150
 - 4、『媽祖研覃考辯』（2014）pp.124-266
- ⑪ 「題順濟廟詩」（1151年、黄公度）という歌は媽祖の生涯を伝えるものとして周知されている。「順濟」は宣和四年（1123）に宋の皇帝の徽宗から賜った封号である。
- ⑫ 「巫媼」とは巫術が出来る年配の女のことである。「不厭混巫媼」の記録だけでは、媽祖が生前、巫媼とよく一緒にいたのか、それとも彼女自身が巫媼であったのかは不明である。しかし、後の文献を見ると、媽祖自身も村の巫に関する仕事をしていた可能性が高い。ここでは一応「巫」の身分であったとする伝承を採用する。
- ⑬ 『宋会要輯稿』とは、宋代の諸制度に関する詔勅、条例などを分類し、集成した書物である。会要所とは以上のことを行う編纂機関のことである。
「礼20・張天師祠」と「礼20・神女祠」は宋会要輯稿影印本（1957）、第20冊（上、下）、51条目参照。「礼21・順濟廟」は第21冊・礼21至23参照。
- ⑭ 龍の能力に関する説は多い。『西遊記』には龍王が雨を降らす話がある。また「龍施雨沛」という四字熟語もある。『龍神感應記』は天啓元年（1621年）に董其昌によって著されたものである。
董其昌（陝西旅遊出版社編集、1997）、『書法教程：董其昌行書“龍神感應記”』

「昔夫子不語怪，乃吾鄉天妃之著靈於海，與茲神之著靈於河…」

- ⑮ 表2の作成にあたって用いた資料は、表1で参照した書籍と同じである。
- ⑯ 潜説友、1268年、『咸淳臨安誌』。
- ⑰ 林氏の系譜によれば、「唐九牧林」と「宋牧林」という二つの有名な支族がある。福建林氏の祖先は晋代の林禄である。唐代から宋代にかけて、門内の九人が次々に「進士」（皇帝が面接官を担当する試験に合格した者に与えられた資格）になった。唐玄宗の年間（712-755）には、その子孫である林披には九人の息子がいたとされる。九人の名前は「林葦、林藻、林著、林薦、林曄、林蘊、林蒙、林邁、林既」という。親子たちは共に刺史（別名「州牧」）の職に就く。なお林蘊は媽祖の祖先である。
- ⑱ 菊地章太（2017a）参照。
- ⑲ 道教は成立当初から龍との因縁について言及しているが、歴史的に見れば龍の方が道教よりも古い。龍信仰・龍崇拝は道教の成立以前より既に存在していたのである。例えば、紀元前五千年の仰韶文化と紅山文化（紀元前4700年頃-紀元前2900年頃）にも龍に対する崇拝が確認される。秦代の龍図がトーテムの一つである。
- ⑳ 媽祖を道教の女神として取り込んだ道教側の最初の書物は、明代の初期、15世紀頃に作られた以下のものである。
『正統道藏洞神部本文類』、194部、「太上老君説天妃救苦靈驗經」、明初、撰人不詳。
『三教源流搜神大全』、明末、撰人不詳。跋文によると、この書物は明代の者が元版の図本（絵本）「搜神廣記」をモデルとして翻刻したものである。
これに対して、元代の黃淵は『黄四如文集』の「聖墩順濟廟新建蕃厘殿記」で既に「補陀大士の千億の化身」（媽祖は補陀大士（観音）の無数の化身の一つ）ということ述べている。
- ㉑ 代表的な例が、女性化した送子観音（子授け観音、慈母観音）である。送子観音と融合したとされるモデルの一つに「送子娘娘」と呼ばれる中国の民間信仰の女神がいる。山東省の観音を祀る寺院に土人形をテーブルに置く俗習があるが、この俗習は送子娘娘信仰に由来するものである。このように中国仏教において送子観音を観音の一種としていく一方で、媽祖信仰においてもまた送子娘娘信仰より子を受けるといふ利益を取り入れている。
- ㉒ 碑記には、河東大直沽天妃宮では、最初、江蘇の僧侶である福慶が管理者として法事などを取り仕切ったことが記されている。
- ㉓ 李露露（1999）、pp90
「台南人称媽祖為佛」
- ㉔ 外的援助の例として、媽祖廟が危機に陥った時、寺院が媽祖廟の職員を受け入れ、媽祖像を寺院に移して安置したことが挙げられる。内的援助としては、媽祖信仰が仏教思想を受容して自らの思想を構築していったことが挙げられる。
- ㉕ 翻訳は二階堂善弘（2006）pp.50-51 のものを掲載した。
- ㉖ 『四庫全書・1168冊』『北溪大全集』卷四三、pp851、臺灣商務印書、1986年。陳淳が同時期に著した『上趙寺丞論淫祀』も有名である。執筆時期は寧宗嘉定年間（1208-1217）であると考え等えられる。
- ㉗ 最初にこれらについて言及しているのは『礼記正義』（2000）、pp180である。陳淳の『字義』にも引用される。陳淳の考えは、血筋が繋がっていない神仏は祭祀する必要があるというものである。
「大凡不當祭而祭，皆曰淫祀。淫祀無福，由脈絡不相關之故。」
全て祀られる資格がなく、基準に該当しない祭祀は全部「淫祀」である。淫祀では福も利も得

- られない。原因は祀られる神は国の承認を得ていない神であり、故郷の神ではないからである。
- ②⑧ 清・康熙、『南安縣誌』巻2には「通遠王在宋時最為靈著，州人祈禱翕赫，酒肉滂沱。及乎散胙飲福，觴豆雜進，喧呼紛藉」との記載がある。
- ②⑨ 略称は「水陸会」である。宋代以後に流行し始める仏教の法会である。最初、仏教だけで執り行われた法会であったが、後に一種の民俗行事となった。「清浄」を強調し、浄土教や禪宗や儒教思想が混在した盛大な法会である。
- ③⑩ 元の法令集である。『大元聖政國朝典章』巻三十、「礼部」巻三・「祭祀」
- ③⑪ 儒教の陳淳らは様々な観点から仏教を批判するが、ここではふれない。また宋代には仏教寺院が非常に多くあったことから、国家の経済に関する問題を生むことになる。一部の僧侶は戒を守らず、墮落した生活をしていたことも問題の一つであった。
- ③⑫ 媽祖信仰の仏教化については、禪宗と浄土宗の思想を取り入れていった場合が多い。例えば、浄土教の影響を受けた「黒い媽祖の面」という地獄救済の思想がある。媽祖廟に入った際、通常、顔色の異なった媽祖を目にする。媽祖像の顔色には、ピンク色、金色、赤色、黒色、白色の五種がある。顔色によって由縁と効力が異なる。厳しくて恐ろしい表情である黒い顔色の媽祖は、人々と正道を守護し、世間にある不正行為、妖怪、災いなどをすべて取り除く存在とされている。また仏教の地獄思想を取り入れ、人間色（ピンク色）の媽祖は現世に生きる衆生を救済し、黒色の媽祖は地獄に落ちた人々を救済するのである。勿論、救済される者は自らが解脱への願いを持っている必要がある。
- ③⑬ 『妙法蓮華經』巻7〈觀世音菩薩普門品 25〉、T09, no. 262, p. 57, b10-13。この中で女性に関する化身は、①比丘尼、②優婆夷、③長者婦女、④居士婦女、⑤宰官婦女、⑥婆羅門婦女身、⑦童女の7種である。
- ③⑭ 日本には「本地垂迹説」という思想がある。『広辞苑』（第七版 pp.2726）には「日本の神は本地である仏・菩薩が衆生済度のために姿を変えて迹を垂れたものだとする神仏同体説」である。
- ③⑮ 『妙法蓮華經』巻7〈觀世音菩薩普門品 25〉、T09, no. 262, p. 57, c19-20
「或漂流巨海 魚龍諸鬼難 念彼觀音力 波浪不能沒」
あるいは巨海に漂流して、竜鬼諸鬼の難あらんに、彼の觀音の力を念ずれば、波浪も没すこと能はず。
- ③⑯ 媽祖による海難救護の記録や説話は多い。
清・屈大均、『廣東新語』巻六・神語海神09條（浙江大學圖書館影印古籍）
「天妃神靈尤異，凡渡海卒遇怪風，哀號天妃，輒有一大鳥來止帆檣，少焉紅光熒熒，繞舟數匝，花芬酷烈，而天妃降矣，其舟遂定得濟。」
天妃はよく神跡を顕す。海を渡る時に嵐に遭えば、天妃に向かって泣き叫ぶと、突然に帆柱に大きな鳥が来て留った。しばらくすると、赤い光が煌めき、船の周りをめぐり、花の香りが匂い立ち、天妃が徐々に降りてきた。そして、船は揺れることなく、安定した状態になり、皆助かった。
- ③⑰ 蔡相輝（2016）pp.172-177 参照する。
- ③⑱ T49, no.2036, p.587, c14-23
- ③⑲ 明・『重修普陀山志』巻三、「禮普陀大士偈」、釋傳燈
「稽首觀音大悲之主…常住寶陀寶陀山在今之南海」（CBETA,GA009, no.8,p.257,a6-p.258,a3）
補陀山は宋代までは「梅岑山」と呼ばれる場合が多い。次の元代については、『釋氏稽古略』巻三に「建於梅岑山之陽。賜額寶陀。今之寺也」という記述がある（T49,no.2037,p.853,b4-5）。
- ④⑩ 『觀音經』所説の觀音菩薩の三十三身とは異なる、民間での觀音の三十三身がある。それらは

楊柳観音、龍頭観音、持経観音、圓光観音、遊戯観音、白衣観音などである。

- ④① 媽祖は観音の無数の化身の一つであることを示している。
- ④② T09.35b26-35c05
「言論未訖。時龍王女忽現於前。頭面禮敬却住一面。以偈讚曰…」
- ④③ 『華嚴経』「入法界品」において、善財童子の旅（53人の善知識をたずねる）の途中で、観音霊地の補怛洛迦が登場する。善財童子は補怛洛迦という南の山に赴いて観音に拝謁する。観音の所在地は、『千手経』、『陀羅尼集経』などでは補陀落となっている。「補陀落」は、サンスクリット語の Potalaka の音訳である。玄奘の『大唐西域記』には「國南濱海有秣剌耶山」「秣剌耶山東有布怛洛迦山」（T51.932a5, 14）とあり、インドの南沿海部に秣剌耶山があり、その東に布怛洛迦山があったことが記されている。
- ④④ 菊地章太（2017a）（2017b）と田中千晶（2008）などの論文を参照。